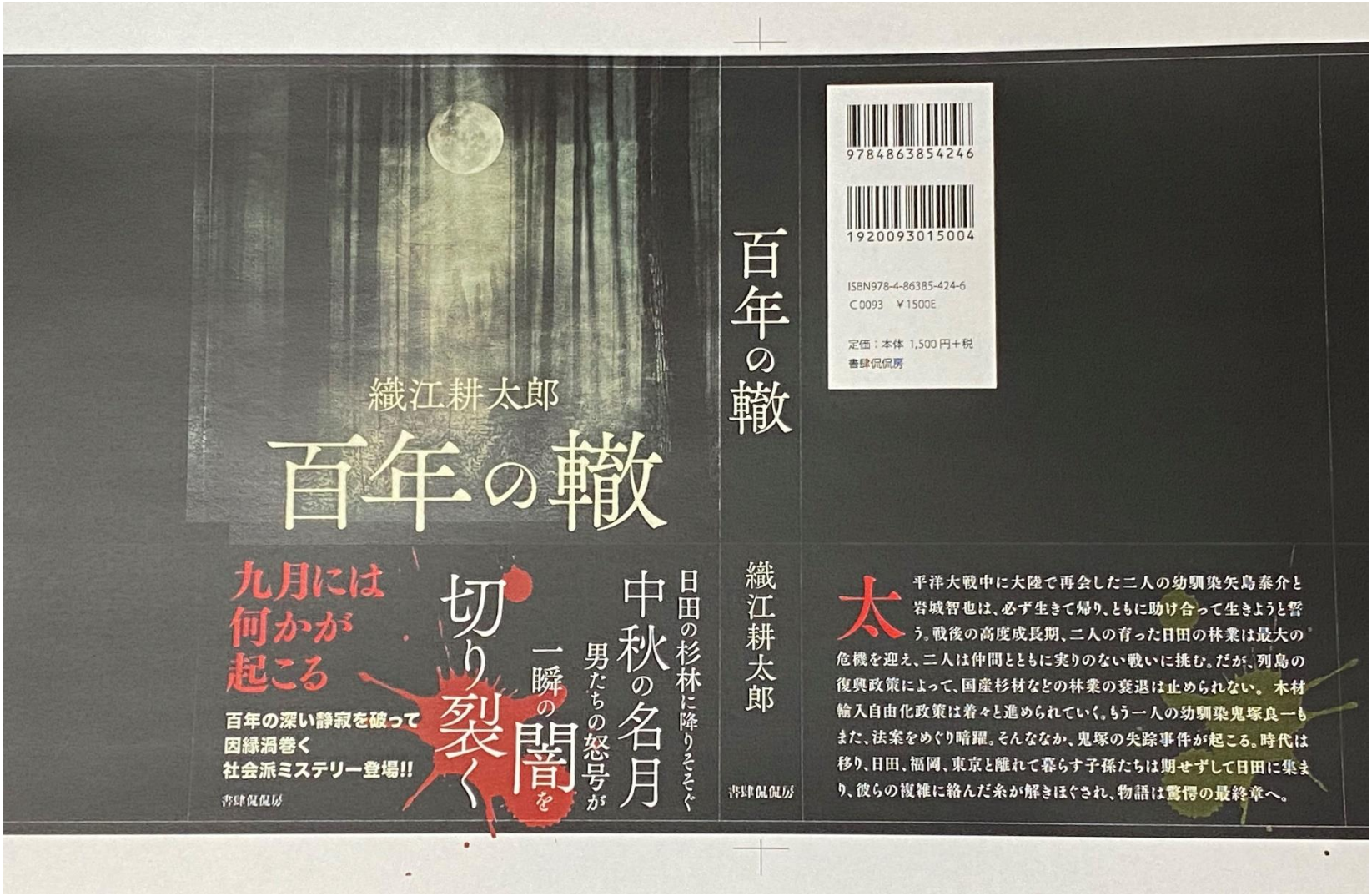
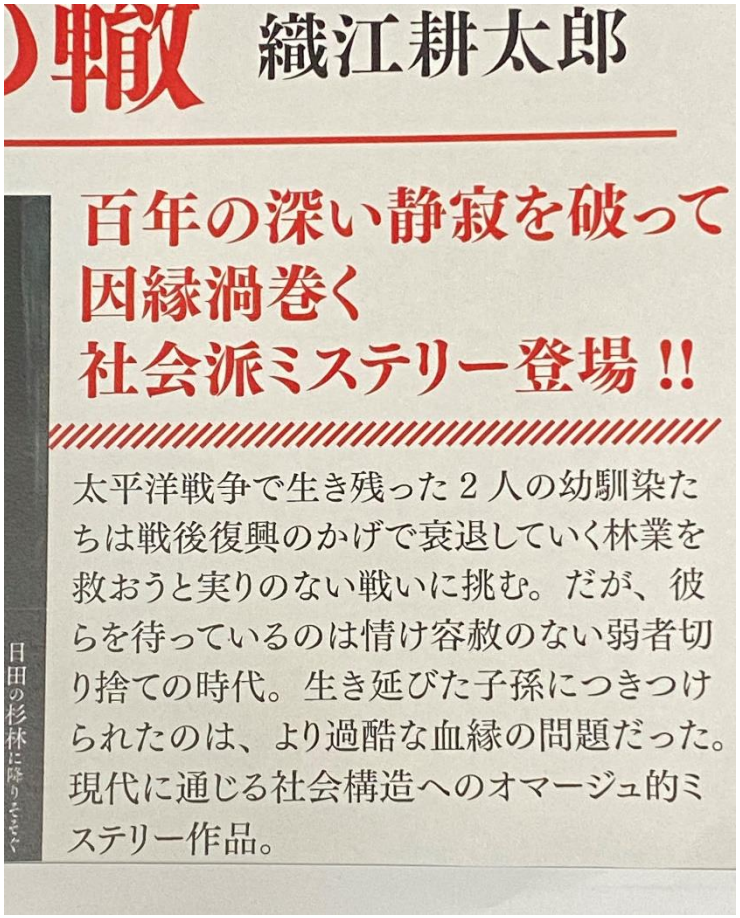
大分合同新聞１月９日インタビュー記事を下に掲載、西日本新聞１月９日郷土の本に掲載





轍　織江耕太郎

百年の深い静寂を破って
因縁渦巻く
社会派ミステリー登場!!

太平洋戦争で生き残った２人の幼馴染たちは戦後復興のかげで衰退していく林業を救おうと実りのない戦いに挑む。だが、彼らを待っているのは情け容赦のない弱者切り捨ての時代。生き延びた子孫につきつけられたのは、より過酷な血縁の問題だった。現代に通じる社会構造へのオマージュ的ミステリー作品。

日田の杉林に降りそそぐ

大分合同新聞

【東京支社】福岡県出身の作家・織江耕太郎（70）が日田市を舞台にした小説「百年の轍」（書肆侃侃房・1650円）を著した。織江は2013年にデビューし「90歳で直木賞を取ろうと思っている」と笑う遅咲きの作家。本作は、疾走感のあるストーリー展開で読者を作品世界に引きこむ。

日田市を舞台に家族の物語

織江耕太郎の小説「百年の轍」

戦後の林業の苦難描く

疾走感のあるストーリー展開で読者を作品世界に引きこむ

（あらすじ）太平洋戦争から生還した幼なじみの矢島泰介と岩城智也は、国の木材輸入自由化政策に対抗し、林業を守ろうと奔走する。そんな中、もう一人の幼なじみ鬼塚良一の失踪事件が起こる。未解決の鬼塚失踪事件は時を経て、矢島の子孫やその家族を巻き込み意外な結末を迎える。

家族は同県大野城市で木材業を営んでいた。「日田のスギやヒノキは人気で、父はよく足を運び、いい話ばっかりしていました。大学生になり、家業のせいで私も日田を訪れたのですが、父がほめそやしていた街にすっかり魅了されました。木曽たっぷりの三隈川、ひんやりと空気が澄んだスギ林。まっすぐゆびるスギの美しさに惚れてしまいました。その記憶があり、日田を舞台にした小説を書こうと思い立ちました」と振り返る。

物語は戦後の高度経済成長期、安価な米産ラワン材などの外材に押される日田林業の苦難を縦糸に、登場人物のそれぞれにわたる血縁たちをつづる秘密を横糸にして織り広げられる。

「戦後、木材輸入自由化を推し進める国策のもとに林業は衰退していきました。これは石炭から石油、そして原発へと変化していったエネルギー政策の構造と似ています。私のこれまでの小説は、原発利権やエコの欺瞞、ODA（政府開発援助）といった現代社会が抱える問題点がテーマでした。本作でも日田の林業の素晴らしさを訴えるとともに、なぜ衰退させるを得なかったのかを問題意識として持ち込みながらストーリーを組み立てていきました」

日田市の林業現場で「木出し」や「間伐」といった作業を取材したという。巧みな展開だけでなく、日田の空気感も楽しめる一冊となっている。

（北瀬川由夏）

日田市を舞台にした小説「百年の轍」を出版した、福岡県出身の作家・織江耕太郎＝大分合同新聞社東京支社

おりえ・こうたろう　早稲田大商学経済学部卒。翻訳会社、動画部、外資系メーカーのマーケティング担当などを経て、経営コンサルタント会社を起業。傍ら創作に取り組み、「残見光原と七人の候補たち」（内田樹先生と共著・論創社）、「暗森の森」（水声社）などを発表。

大分合同新聞インタビュー記事（１月９日）